

前田の〈ちょっと経営を考えよう〉第 191 回

平成 19 年も早、半年間過ぎ去ってしまいました。ほんとうに時の経つのは早いものですね。(でも遅く感じてみえる方もあるかも?)

この半年間の努力の成果がぼちぼち表れてくる頃です。(また逆に努力を怠った人には厳しい試練が待ち受けています) いずれにしても因果応報ですね。

ところで、オーナーにしかできない社長の仕事を一言。

高い志をもって判断し、行動していれば、お天道様が見ていてくれて、うまくいくように思えてくる。

私の場合それが、決断そして社長の行動の支えになっています。じっくり考えはしても悩みはしない。

社長という立場は孤高かもしれませんが、だからこそ時代感覚を持ち、会社の将来を見据えることができるんです。あえて、孤高な存在でいないと、社員と一緒に悩んでしまう。悩むのは経理担当役員にでも任せておけばいい。

私は大きな決断を下すときほど闘志が湧いてきます。大きな課題に自分の判断で立ち向かえることこそ、オーナー経営の醍醐味ですから・・・

売上 120 億円、従業員 150 名の 44 歳の社長談です。どう思われますか?

「社長業は厳しいです。でも又達成感もあります。」  
 今年もあと半年です。後悔しないようお互いがんばりましょう!!

留保金課税制度について

佐藤 洋

19 年度の税制改正により資本金の額または出資金の額が 1 億円以下の中小特定同族会社については留保金課税の適用対象から除外されることになりました。

この改正により中小企業にとって不可欠な内部留保の充実が図られることとなります。

これにより今後の留保金課税は次のようになります。

課税の対象となる法人

株主等の一人およびその同族関係者等で、その持株割合等が 50% 超となる法人(以下、「特定同族会社」といいます。)

ただし、資本金または出資金の額が 1 億円以下の法人は除かれます。

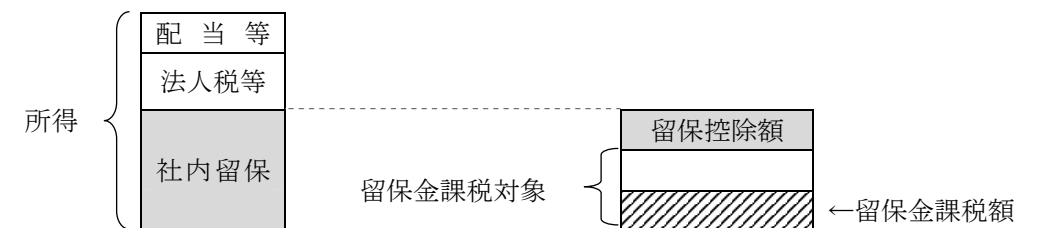
留保金課税制度

同族会社の場合、利益が出ても、オーナー自身が株主として受け取る配当金に対する所得税の課税を免れるために、あえて配当をせず社内留保するなど、税負担の軽減を図ることが比較的容易です。

そこで、同族会社が所得のうち一定の金額を社内に留保したときは、通常の法人税とは別に、その留保金に対して特別に課税することとされています。

$$\text{留保金課税額} = [(\text{所得} - \text{配当等} - \text{法人税等}) - \text{留保控除額}] \times \text{特別税率}$$

※ 年 3,000 万円以下の部分=10% 年 1 億円以下の部分=15% 年 1 億円超の部分=20%



留保控除額 次の①～③の金額のうち最も多い金額

- ① 所得等の金額の 40%
- ② 年 2,000 万円
- ③ 期末資本金×25%－利益積立金額

適用期間

平成 19 年 4 月 1 日以後に開始する事業年度

今回は中国の賢人訓を⑧訓下記します。  
じっくり読んでいただいて生き方、経営の仕方の参考としてください。

① 天知る地知る我知る人知る  
「後漢書」より

後漢の楊震のおかげで役人になった王蜜という男が、夜こっそりと楊震を訪ねて、「暗がりの中ではだれもわからない」と言ってお金を差し出した。それに対し、楊震が答えたことば。

だれも知らないと思っても、天と地、そして私とあなたが知っているから、悪いことは必ず発覚するということ。

人が見ていなくても悪いことはしてはならない。

政治家への教訓でもありますね

② 天網恢恢、疎にして失わず  
「老子」より

恢恢は広く大きいという意味。

天の網は広くて大きく、目は粗いように見えるけど、何ひとつ取り逃がすことはない。

つまり、悪いことをすれば、いつかは必ずばれて、報いを受けるということ。お天道様はお見通しなのだ。

③ 君子豹変す  
「易経」より

豹変とは豹の毛が秋になって抜け変わり、一変して色鮮やかな模様を見せること。

まちがっていたとわかったらすぐに改めることをいう。

まちがいはだれにでもある。気づいたらすぐに改めよう。

(今では自分に都合が悪くなると、それまでの態度を一変させるという意味で使われることが多い)

④ 霜を履みて堅氷至る  
「易経」より

霜が降りると、やがて堅い氷の張る季節がやって来る。

物事が起こるには、必ず何らかの前兆があるということ。たいしたことがないと思っていると、だんだんそれが蓄積されてきて取り返しのつかないことになってしまう。

前兆が見え始めたら、そのための用心や対策を怠ってはならない。

⑤ 捲土重来  
杜牧の詩「烏江帝に題す」より

捲土は土煙を巻き起こすこと。重来は再び来ること。

つまり、一度破れた者が、勢力を立て直し、土煙を巻き起こすほどの猛烈な勢いで、再び攻め寄ることをいう。

何ごととも失敗したからといって、それで諦めてはいけない。失敗の原因を考え、もう一度チャレンジしてみなければならない。

⑥ 疾風に勁草を知る  
「後漢書」より

勁草は強い草のこと。強い風が吹くと、風にも負けない強い草を見分けられるということ。

これは、後漢の光武帝が初めて兵を挙げた時、旗色が悪くなると皆逃げ出してしまったが、最後まで残って戦った王覇に対して、光武帝が言ったことば。

困難や試練に遭遇したときに、初めて人の真価がわかるという例え。

逆境のときにこそ、周りに流されることなく強い意志をもって行動しよう。

⑦ 益者三友、損者三友  
「論語」より

付き合っただけのためになる友達には三種類の人があり、ためにならない友だちも三種類の人がいる。

ためになる友だちは正直な人、誠実な人、教養のある人であり、ためにならない友だちは不正直な人、不誠実な人、口先だけうまい人である。

⑧ 三宝  
「老子」より

人生において必要な3つの宝。

人をいつくしむこと。

物事を控えめにすること。

人の先にたたないこと。

人をいつくしむからこそだれからもばかにされないし、控えめだからこそ行きづまらない。人の先に立たないからこそ、やがて指導者として尊敬される。